

15 【げんせいかん】

村のはずれに、一件の宿屋がありました。

こんな村に観光でくる者も、仕事でくる者もないはずなのに、一件だけ宿屋がありました。

平屋で、客室も一つしかない。

村のはずれだから、町に近いかというと、そうではなくて、隣村に近い。

隣村はこの村よりも貧しいから、客なんかぜったいこないし、町からは遠くて面倒な場所だから、やっぱり客なんかめったにこない。

この宿屋は、十年前ご主人を戦争で亡くした、三十三歳の女性がやっています。

このひとは外出しないので、ぼくはみたことがないけれども、女優の原節子（はらせつこ）にそっくりの、村一番の美人だそうです。

ほんのたまに（母親いわく）、

「物好きがやってきて」

その宿屋にとまります。

そうだ、物好きでもないところない。

完ちゃんいわせると、

「女好きじゃろ」

ということになる。

そうか、女好きならこんなところまでくるのか。

今回の物好き（あるいは女好き）は、胸を病んでいるとの事でした。

どうりで、宿屋の前を通りかかると、変な咳（せき）がきこえます。

げふっ

げふっ

げふげふ

げふげふ

気持ちのいいものではない。

それでも宿屋のおかみさんは、やたらに親切にしているらしい。

病人に親切にするなんて、あのおかみさんもいいところあるな、とおもったのだけれども、そのお客さんは（完ちゃんいわく）、

「母性本能をくすぐる」

男性らしい。

「作家の太宰治に似ている」

とも読書家の完ちゃんは言いました。

くすぐるは解るが、母性本能はよく解らなかつた私は、

「なんじゃ、そのぼせいほんのう、というんは」

ときくと、

「抱きしめたい、ちゅうことじゃ」

完ちゃんは、えらそうにいいました。

「ださいおさむが、はらせつこを、だきしめるんか」

「金ちゃん、その逆。女が男を抱きしめるんじゃ」

また完ちゃんは、えらそうにいいました。

えらそうにいうのは、ぼくの持ち味だとかんがえていたので、しゃくにさわって、懐爺のところに行きました。

「完ちゃんのいうとおりですよ」

そう懐爺がいうので、気分を害しました。

でも、さすがに懐爺でした。

きた甲斐（かい）があったというものです。

「でも町では、母性本能をくすぐるおばけが沢山出沒（しゅつぼつ）して、その男性はその村八分というか町八分で、この村に流れ着いたのでしょう」

「なんじゃ、あれもおばけかい。なら【ざしきわらし】かい、【ごくつぶし】かい」

「【ごくつぶし】に似たおばけで、【げんせいかん】といいます。げんせいは、現世で今の世のこと。かんは患者の患です」

「やっぱしな。すげえせきじゃった」

いやだったけれども、ぼくはおもいだしてしまいました。

げふっ

げふっ

げふげふ

げふげふ

「あれは咳ではありませんよ」

懐爺は断言しました。

「だば、びょうにんでねえのか」

「一種の病人ですが、胸はわずらっておりません」

「めんどうなおばけじゃのう」

「あの咳に似たものは、いわば求愛の表現ですね」

懐爺はもっと面倒なことをいいました。

「きゅうあいつて、なんじゃ」

「そんなことより【げんせいかん】は、退治しますか」

懐爺は話をそらせました。

「たいじ、できるんか」

「わたしらにはできません」

「ならば、きくな」

ぼくはどなりました。

「退治しなくとも、遠からずにげます」

「おばけが、にげるんか」

「宿屋のおかみさんが、【げんせいかん】に首ったけになったら、【げんせいかん】はにげますよ」

この話も面倒臭い。

それでもぼくは、一度おばけが、すたこらさっさとにげるのを、みたかったのです。

翌日、完ちゃんが、

「あのお客さん、にげちゃったよ」

と、報告（ほうこく）してきました。

「はやいのう」

「宿屋のおかみさんが首ったけになっちまってさ。おんなごころもしらないで、つれないおかたよ」

完ちゃんは、ませた口調でいいました。

「おんなごころは、おばけごころより、おっかないんじゃ」

ぼくも負けずに、ませた口調でいいました。

宿屋のおかみさんは辛いだらうと、それも気になったのです。